

## 『采女―佐々浪之伝』について

あらすじ

春の大和春日大社を参詣した諸国行脚の僧の前に歌を詠む里女が現れます。女は猿沢の池を尋ねられると案内し由来を語りまします。昔、采女が帝の寵愛を失ったことを恨み哀しみ、この池に身を投げて空しくなりました。帝はこの有様を見て「吾妹子が寝きたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞ想しき」（我が愛しい人との契りの後の寝乱れ髪が、今は猿沢の池の玉藻のように見えることの悲しさよ）と嘆き弔われた。帝の御心も知らずお恨み申したのはあさはかだったと物語った女は、自分がその采女の亡霊だと明かして消え失せます。

（中入）

旅僧は土地の者に采女の入水した謂れを聞き、池の汀で法華經を誦して回向すると、水中から美しい采女の亡霊が現れ、仏事により補陀落浄土での往生を喜びます。そして仏の教えを賛美し報謝の舞を舞い、幾重の弔いを願って又池の底に帰ってきます。

今回粟谷能の会での小書「佐々浪之伝」は、以前粟谷能の会研究公演にて取り組んだ際の反省点を考慮し、采女という女の得脱の喜びに焦点を当ててみたいと思います。

詞章

ワキ

是は都方より出でたる僧にて候。我末だ南都を見ず候ほどに。只今思い立ち南都一見と志し候頃、彌生の末つ方。花の都を旅立ちて。まだ夜をこめて東雲の。

ワキ、ツレ

影共に我も都を下り月。我も都を下り月。残る朝の八重霞深草山の末続く木幡の関を今越えて。宇治の中宿井手の里。過ぐればこれぞ奈良坂や春日の里に着きにけり春日の里に着きにけり。急ぎ候ほどに。これははや春日の里に着きて候。心静かに社参申さうずるにて候。

ワキ

またこのあたりに猿澤の池と申す名池の候。ところの者に尋ね一見せばやと思ひ候。もっともにて候。

ツレ

サシコエ

(アシラヒ出)

吾妹子が寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しき。

シテ

ワキ

いかにこれなる女性に尋ね申すべきことの候。これは此の所始めて一見の者にて候が。承り及びたる名池猿澤の池を未だ知らず候御教へ候へ。さあらば猿澤の池を見せ参らせ候はん。こなたへ御入り候へ。のうのう、これこそ猿澤の池にて候へ。この池のほとりにて。御経を読み仏事をなして賜り候へ。

シテ

ワキ

御経を読み仏事を為すべき事は。易き間の御事にて候さりながら。誰と名をさして回向申し候べき。

シテ

之は古采女の身を投げ空しくなりし池なり。采女とは君に仕へ申す上童なり。然れば天の帝の御歌にも。吾妹子が寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞ悲しきと。詠ぜし歌の心をば知る

し召され候はぬか。

ワキ  
承り及びたるようには候へども。詳しくは知らず候、御物語候へ

シテ  
天の帝の御時。一人の采女ありしが。初めは叡慮に叶い御恵浅からず。程なく思し召し捨てけるを。及ばずながら怨み参らせ。此の池に身を投げ空しくなりしなり。  
げにげに我も聞き及びしは。帝哀と思し召し。

ワキ  
此の猿澤に御幸なつて。

シテ  
采女が死骸を叡覧あれば。

ワキ  
さしもさばかり美しかりし。

シテ  
翡翠の簪、嬋げんの鬢。

ワキ  
桂の黛

シテ  
丹花の唇

ワキ  
柔和の姿引変えて

シテ、ワキ  
池の藻くずに乱れ浮くを。君も哀と思し召して。

同音  
吾妹子が寝くたれ髪を猿澤の。(打切)寝くたれ髪を猿澤の池の玉藻と。見るぞ悲しきと叡慮にかけし御情。忝なやな下として。君を怨みし儂さは。例えば及び無き水の月とる猿澤の。生ける身と思すなよ。我は采女の幽霊とて。池水に入りにけり池水の底に入りにけり。(中入)  
アイ語

待謡

ワキ、ツレ  
池の波、夜の汀に坐をなして。夜の汀に坐をなして。仮に見えつる幻の。采女の衣の色々に甲ふ法ぞ誠なる、甲ふ法ぞ誠なる。

一声

シテ

あら有難の御弔やな。妙なる御法を得るなるも  
心の水と聞くものを。騒がしくとも教えあらば、  
浮かむ心の猿澤の、池の蓮の臺に座せん。よく  
よく弔い給へとよ。

ワキ

不思議やな池の汀に現れ給ふは。采女と聞きつ  
る人やらん。

シテ

恥ずかしながら古の。采女が姿を現すなり。仏  
果を得しめおはしませ。

ワキ

もとより人々同じ仏性なり。何疑ひも波の上。  
水の下なる鱗も

ワキ

成仏得脱

シテ

疑い無し。

同音

ましてや人間に於いてをや。龍女が如く我もは  
や。変成男子なり采女とな思ひ給ひそ。而も所  
は補陀落の南の岸に到りたり。これぞ南方無垢  
世界。生まれんことも頼もしや、生まれんこと  
も頼もしや。吾妹子が。

序之舞

シテ

猿澤の池の面。

同音

猿澤の池の面に。水蕩々として波また、悠々た  
りとかや石根に雲起こって雨は。窓傭を打つな  
り。遊樂の夜すがらこれ。采女の戯れと思すな  
よ。讚仏乗の因縁なるものをよく弔はせ給やと  
て又波に入りにつけり、又波の底に入りにつけり。